

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 並木 志乃

<論文趣旨>

本論文は、地域の情報発信能力向上、コミュニケーションの円滑化を行うための評価指標の開発を行い、その評価指標自体を地域社会の構成員との協働による自省的学習を通して地域社会の実情に応じた改善を行い、もって地域社会構成員自身の評価能力、学習能力、コミュニケーション能力を向上させようとするものである。

地方分権化が進展する中、地域社会を再構築しようとするのであれば、地方自治体という公共を担う組織と、多元的な価値を持つ住民との間での「関係性」の構築が重要な意味をもつものと考えられる。地域社会は地域住民、行政、企業やNPO、教育機関、公共施設など様々な構成要素から成り立っており、そのような地域を構成する多様な主体が一体となって認識を深め、人々の意思疎通をより円滑にするためのコミュニケーション回路を構築していくことが急がれる。それにはまず、地域に関して人々が持っている情報を共有・交流することを前提として、地域の状況を可視化し、社会的な議論を進めていくことが必要である。地域社会の多様な住民間の対話や学びをより充実させる仕組みづくりや地域情報の交流があつてこそ、コミュニケーションが活性化される。従って、地域情報の交換や人々の学習が成立することで、新たな地域社会の発展方向に進化する契機と考えられる。

しかしながら、情報発信やコミュニケーションは、人々の関係性を橋渡しするものとして、その重要性が認識されながらも、具体的な評価指標という形では表されてこなかったのであり、評価指標の開発が急がれている。その点、本論文は、新たな地域コミュニケーションの回路を築くツールとしての評価指標の可能性に着目し、その開発を行っていくことを目的としており、地域情報の量的限界はあるにせよ、地域住民が日常持っている地域に対する関心や出来事などの、多様かつ散在している地域情報をもとに評価を行うことで、情報の共有化を目指すべく、新たなコミュニケーションの機会を作ることに寄与しようとしている。

本論文は、以下の5つの章、引用・参考文献一覧、資料から構成されている。

第1章では、上述の問題設定、研究アプローチについて述べられている。すなわち、地域社会をめぐる諸課題に応えるためにも、地域住民による地域情報の発信過程で生じている一連の学習に着目し、地域社会との接点や住民間での相互作用について着目している。そして研究の方法論として、文献・資料による理論分析、実践に基づく応用・展開という2つの視点から相補的に把握し、研究を行う旨が述べられている。理論面では地域コミュニティに関する学問領域のなかから、「地域コミュニティ」、「政策・行政評価」、「学習評価」を取り上げ、現状と課題について検討し、地域社会で実践されてきたケーススタディをもとに、評価指標を開発し、この評価指標を3つのフィールドにおいて展開すると述べている。

そして第2章においては、先行研究を通して、「地域コミュニティ」、「政策・行政評価」、「学習評価」という3つの観点を中心に考察を進めている。まず、我が国の地域開発政策の展開と地域情報化政策について検討を行い、今日の地域社会に与えた影響とその限界について考察している。その上で、地域コミュニティ論の展開をふまえ、特に、地域の状況に即した地域情報の活用という見地から、地域社会のコミュニケーションと住民参加について検討している。また、近年の地域社会の状況から、地域の価値観構築との関わりについても考察を加えることで、地域のコミュニケーション回路について、その問題点と課題を明らかにする。そして、こうした諸問題を考察するために、地域社会で行われてきた評価活動を取りあげ、評価の意義と歴史的展開、及び評価の方法を先行研究から検討している。評価は様々な地域において取り入れられており、それらの実践例からは、地域社会におけるコミュニケーションと市民参加の関係に、形成的な評価や内省等の学習が寄与していることを明らかにしている。しかしながら、地域住民のコミュニケーション過程にみられる学習に着目した評価指標というものがほとんど存在しておらず、本研究において開発していくことは意義があると主張している。地域社会での評価活動が多面的に行われることが、地域社会の現状をよりよく把握することにつながると述べ、特に、評価者間のコミュニケーションを重視し、その質的な側面に焦点をあてた評価指標を開発するとしている。

第3章では、評価指標を開発している。筆者は、地域住民を主体とする評価活動に着目し、地域コミュニティにおいて、人々の間で交わされている地域情報の内容や、情報発信のプロセスに生じた学習メカニズムを具体的に調査・分析している。評価指標の開発にあたっては、熊本県人吉球磨地域における情報発信活動をケーススタディとして取り上げ、質的研究法の一つであるグラウンディッド・セオリーを用いて、インタビュー・データをベースとして評価指標を構築している。評価指標の妥当性を高めるため、形成的評価をかけ、評価指標を改良している。このような作業を通して、地域社会でのコミュニケーションの円滑化が地域社会の発展方向に関わってくることを明らかにしている。

第4章では、評価指標の展開という側面から考察を進めている。本論文によれば、地域社会において展開されてきた評価活動では、評価指標やベンチマークなどによる現状認識への深まりに加え、コミュニケーションを媒介とした相互作用が発生しており、その場合のコミュニケーションは、情報交換や社会的な議論も含めて様々なレベルがあり、それらが、地域情報の活用や地域人材の再発見、地域づくりのプロジェクトや政策等に有機的に結びつくことで意味を持つてくる、と述べている。そして第3章において開発された評価指標を、地域コミュニティのなかで実装し、評価指標を用いて地域住民による評価のワークショップを行っている。対象地域としては、人吉市、他地域の代表例として札幌市と藤沢市の3地域で実装している。その結果として、上記3地域においてみられた議論の内容や評価指標の展開における課題などを考察している。

第5章では、前章の評価展開から、改めて情報を活用することについて問い直し、情報やコミュニケーションのもたらす地域社会の発展方向について考察している。特に、地域社会の諸制度や仕組みづくりという視点から地域の基盤づくりについて検討を加え、人材に焦点をあてて、地域住民が心理的に安心できるコミュニケーションの円滑化と今後のあり方について言及している。

関係する多分野の先行研究、諸資料を丹念に渉猟した上で、インタビュー等のフィールドワークも加えた労作である。本研究は、地域コミュニティの崩壊が指摘される中で、住民参画による地域づくりの必要性の高まりに対して、地域情報化を対象とした評価指標を開発しようとする意

欲的で独自性を有する試みであり、社会的意義のある研究として評価できる。また、具体的なフィールドでの研究を通じて、理論と実証とのフィードバックを心がけて研究を進めようとしている点も高く評価できる。

社会調査・統計処理などの計量的技法などにおいて今後さらなる研鑽を必要とする面もあるが、論文の問題設定、アプローチにおいて独自性を有し、関連領域の先行研究も十分に踏まえ、学術的にも、社会的にもきわめて有意義な論文として評価する。

よって、本審査委員会は、本論文が博士(学際情報学)の学位に相当するものと判断する。